



琳派という名前は、この流派を代表する一人の画家尾形光琳の「琳」に由来しています。

琳という文字は美しい玉という意味を持っており、この流派の絵画作品を特徴付ける色彩豊かな装飾性を語るのに、琳派という名前はとても素晴らしいように思われます。

現在、琳派と呼ばれる作家には本阿弥光悦(1558～1637)俵屋宗達(生没年不詳)尾形光琳(1658～1716)酒井抱一(1761～1828)などがあり、その流派は神坂雪華(1866～1942)にいたる二十世紀まで続いてきました。

大和絵の伝統を基盤として、豊かな装飾性・デザイン性をもち、絵画を中心として書や工芸を統括する総合性、家系ではなく私淑による断続的な継承、などが特質です。

江戸時代の他の流派とは異なり、琳派は直接の師弟関係にこだわることなく流派が形成されていました。

光琳が光悦や宗達を手本とし、抱一が光琳を先生として尊敬したのは、彼らがそのような選択を決められたのではなく、制作の中で自由にその手本や先生を選んだからでした。

さらには、その生存時代から分るように、彼らは、直接の師弟関係を持ってさえいなかったのです。

先人の作った作品に対する感動と共感が、自分の作品制作と流派を意識する強い力となっていたのです。

そのために琳派はそのの作品伝統を意識しながらも、作品の自由な解釈と創意が加えられることとなりました。

琳派では模写による創作を行う際に、自由な解釈と変更が許されていることが風神雷神だけでなく他のテーマの作品、例えば鶴や燕子花(かきつばた)などを描いた作品からも確認することができます。

そして現代もなお、古典としてだけではなく、創造の源として生き続ける力を持っているのです。

# 扇面散図文

## 筆酒井抱一



背景に金泥で流水を描き、菊・梅・桔梗・燕子花（かきつばた）の扇面を貼り付けた酒井抱一の扇面散図二曲屏風文です。

添えられているのは十三人和歌集の恋歌ですが、書と画の見事な調和に見とれます。

扇子は源氏物語の時代は和歌を書いたり花を載せて贈るものでありましたが、時代が下るにつれ儀礼の道具としても重んじられ、冠婚葬祭での持ち物のひとつとされました。

近年には天皇が三種の神器が安置されている内侍所へ参拝する時の持ち物として、御月扇と称し月毎に末広の扇が絵所より新調されています。そのほかに表面に古代中国の賢聖、裏面に金銀

砂子に草花を描いた賢聖御末広という末広が献じられることもありました。この扇面散図の菊の生垣に京山独自の偏光系を用い、草花を育てる陽射しをあらわしました。身につけたときにあなたがきらりと光ります。流水は観世水と称され、古来より長寿の厄除け模様として用いられた縁起の良いものです。

抱一の画は華麗な琳派の流れを汲みながらも奥ゆかしい色遣いと流麗な筆遣いに特徴があるといわれます。

酒井抱一（1761-1828）は、譜代大名・酒井雅楽頭家の二男として江戸に生まれました。文芸を重んじる酒井家の家風を受け、若き日より俳諧や書画をたしなみ、二十代で狂歌や浮世絵などの江戸の市井文化にも手を染めた抱一は三十七歳で出家して自由な立場に身を置きます。そのころから、宗達、光琳が京都で築いた琳派様式に傾倒し、江戸後期らしい新たな好みや洗練度を加えた、今日「江戸琳派」と呼ばれる新様式を確立していきます。風流で典雅な花鳥画を得意とし、独自の世界を作り上げました。

# 桜山吹図

## 筆俵屋宗達

桜と山吹が咲き誇る山中の屏風画面の上に、金銀泥で装飾した色紙が貼り付けられていて、寛永三筆の一人、本阿弥光悦が和歌を書きしるしています。

今をさかりと咲き誇る桜が京山の偏光系のきらめきを得てその存在感をいっそう高めています。

色紙に書かれた和歌は、歌詠みにとっては和歌を詠む際の手本としても尊ばれ、藤原俊成に、「歌の本軀には、ただ古今集を仰ぎ信ずべき事なり」と述べられた古今和歌集から採られています。

慶長10（1605）年頃に制作された本作は、桃山時代から江戸初期にかけて京都で花開いた「琳派」の創始者、本阿弥光悦と俵屋宗達の合作によるものと言われています。

宗達の初期の作風を伝える重要な作品です。ゆるやかに広がる緑の丘に、真っ白な山桜と金色の山吹が咲き誇り、山里の遅い春の訪れを感じさせます。

宗達は、この雅やかな情景を描いたうえ、自らの下絵に光悦が古今和歌集の句を書きしたとされる色紙を屏風全体に優美に配しています。

おもふどち 春の山邊にうちむれて そこともいわぬ たびねしてしが  
素性法師

※「親しい人と一緒に泊まる場所も定めずに気ままな旅をしたいものだ」というほどの意。

宗達は六曲一双の屏風と二曲一双の屏風とを画題によって使い分けていたと伝えられています。そして二曲一双の屏風こそ宗達の独自性独創性が如何なく発揮されたものだそうです。

王朝文学を視覚化した功績もまた忘れることが出来ません。宗達はバランスと美しさを兼ね備えた数多の作品を生み出しました。

